

農園便り 2月号 (121号) 2023/2/1

文責 筒口 典康

1月20日。7時45分。 姪の洋子さん宅の貸アパートの屋根に、霜は降っていない。 東京は快晴。 北海道、東北、北陸は大雪か。 年始め、最強の寒波が訪れるとのことで、畑を見てまいりましょう。

地球温暖化

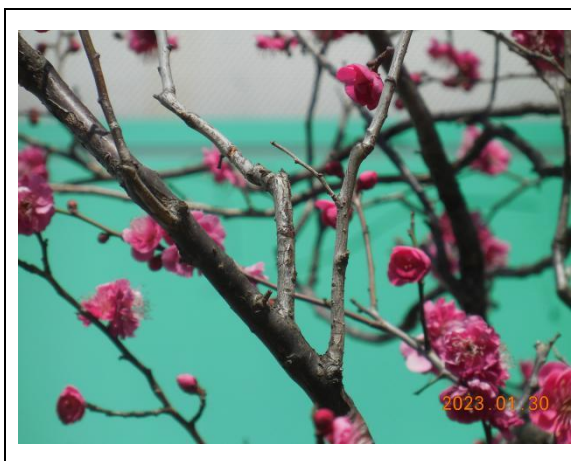
TVの報道に釘付けになる。 極地・高山の氷河の消失、永久凍土も溶けている。 異常な降水。 河川の氾濫。 海面の上昇、高潮・高波・海蝕。 かつてない規模の森林の大火災と森林の消失。 苦しむ動・植物。 海の汚染。 成層圏も汚れている。

悪いことに、プーチンの起こしたウクライナ侵入の戦争、環境の破壊が進む。 地球の全生命が危険にさらされている。 もう取り返しがつかないのであろうか。 ボタン一つで終る危機が迫っている。「核の利用も辞さない」と脅す。 悪魔顔になったプーチン。

私は死にたくない。 1945年(昭20年)、敗戦当時のようなひどい壊滅(長崎・広島・大阪・東京・・・)に、もう遭いたくない・・・。 千代田区の街一帯は全焼。 集団疎開先で、栄養失調。 餓死寸前の7歳の自分を思い出す。 お腹が空いても食べることのできなかつた体を思い出す。 消化管が受け付けないのである。

人類の築いた文明も、全て消滅するのであろうか。 地球がただの星屑になるのであろうか・・・。 でも、人類の痕跡は、残る・・・。 だが、その痕跡は、誰も見ることは無いであらう。 微生物たちは生きているのか、???。 全面凍結、大氷河期になっていくのか・・・?。

東京で梅の開花の知らせが。 福寿草の蕾が覗く。 春も近い。



1/30 芝勝商会(花屋) 店先の紅梅



1/29 都立善福寺井公園 白梅咲く

ダイコンの根穴を利用する

ダイコンを収穫しますと、直径 12 cm ほどの穴が開きます。不耕起栽培の「追肥穴」として使います。自作の「穴あけ具」よりも太い穴だ。ダイコンの根穴は便利である。追肥穴として、活用する。有機肥料を穴に入れる。

有機の肥料としまして、乾燥カニ殻(芝勝)、醗酵豚糞(グリーンランド)、マルチ玉肥(生活クラブ生協・長浜商店 0280-56-1100 栃木県)。ダルマ堆肥(タキイ種苗)。自作のぼかし肥料等の有機物を使います。さらに、「糠」を穴に入れます。ソマチット粉末(鉍物粉・中学の同窓の二瓶満吉氏が最近起業する)を振ります。ダイコン根穴は、重宝である。

不耕起栽培を続ける 畝を耕さない

小面積(15m×15m)の区民農園で、基本構造を作ります。2つの広幅畝に、追肥用の溝をそれぞれの畝のほぼ中央部に掘ります。(やさい畑 4月号 P90・91)

手持ちの有機物をこの溝に入れます。「菌」種を入れます。「糠」を入れます。「刈草」、「収穫物残滓」、「醗酵鶏糞」、古くなった食材の「粉」、「米粉」とか。そして、「魚粉」とか……。手に入る有機物を入れます。 [育土する]

溝に「麹菌」・「納豆菌」・「乳酸菌」・「酵母菌」…等を撒く。手元にある菌で良い。酵母菌なら、「リンゴの皮」「葡萄の皮」…、何でも身の回りに居る菌で良い。無ければ畝の土で良い。「納豆菌」なら納豆を食べた洗い汁で良い。「乳酸菌」なら糠味噌の「糠汁」と言う分けです。 [菌を育てる]

植物たちが、この追肥用の溝に根を伸ばして、必要な養分を取りに行くように仕向けます。これで、肥満野菜にはなりません。「健康野菜」が育つ。ともかく、耕さないのであります。追肥溝の上に、足場用の「板」を置きます。仮通路になります。根は、そのまま残す。そしてその根の周りに、「糠」を少々振る。「菌」を振る。耕さないのであります。収穫が終わり、片付けの時に、野菜たちの根部は、株の根ぎわで刈り取る。掘り起こさない。とにかく畝を耕さない。必要な場合に、三角鍬で軽く混ぜるだけ。 深く耕さない。

「通路用の板」の効用

板で雨が直接当たらない。水分の蒸発を防ぐ。紫外線を防ぐ。保温する。通路として使えば、根を踏まない効果がある。作業用、仮通路になる。

板の下では、小動物・微生物たちが大喜び。で、周囲が温かくなる。(発酵熱)菌や細菌たちの手によって、各種のアミノ酸の生成、酵素・ビタミン・植物ホルモン・微量成分のキレート化が進む。栄養たっぷりの土が出来るのであります。「元気野菜」が育つのであります。「元気野菜」には、病虫害は発生しない。

植物たちは移動できない。そこで、野菜たちは攻める…。抗菌物質を作ったり、根から浸出する炭水化物の養分を始めとする各種の養分で、「菌根菌」を呼び込む。これで、「悪玉菌」を排除するのであります。また、マメ科植物では、「根粒菌」を呼び込む。根粒菌は、何と、空気中の「N」(窒素)を吸収して

植物体に供給しているのであります。膨大な量であると言います。

追肥用溝の上に置く「板」は針葉樹材よりも、ラワン材が良いようだ。針葉樹材は乾燥と過湿で、割れが入る。比較的安価なアメリカ松(パイン)材でも良いでしょう。15 cmぐらいの幅があれば体を支えられる。仮通路になります。

とにかく畝は、耕さない。必要な時は、表面をかき回すだけにしておきます。根は、根穴を作るのであります。「団粒構造」が作られると言う分けです

2012年、明大農学部(生田)で開かれた「アグリカルチャー」受講

現代農法=慣行農法の講習を受けました。 1年間の勉強でした。

畑地はすでに用意されており、「堆肥」と「配合化成」を中心とする農園でした。「農薬散布」については、受講生が作業することは一度も無かった。

昆虫の姿をあまり見かけませんでしたので、「薬剤散布」はされていたと思われれます。薬剤に関する授業はありませんでした。

1m50cm幅の広畝が作られていて、すでに大型耕運機で作業されていた。私たちは、畝のマルチ作業からの始まりでした。ビニールマルチをかけて、化成肥料(8・8・8)の施肥。トマト、ナス、ピーマン苗の植え込み。トウモロコシ、コマツナの種を蒔く。防寒ネット張り。支柱、結束など…の実修。勉強になりました。まさに、慣行農法の実践でありました。追肥も化成肥料(8・8・8)でした。秋に入って、秋冬野菜を作りました。

学部は小田急線生田にあり、苗や種子は、近くにある「サカタ種苗」で仕入れていたようでした。下請け生産者から直接入荷。新鮮で、元気な良い苗を扱いました。

カルチャーは、藤原俊六郎教授の指導で、諸先生、助手の方々にご指導いただきました。大層良くできまして、嬉しかった。楽しかった。

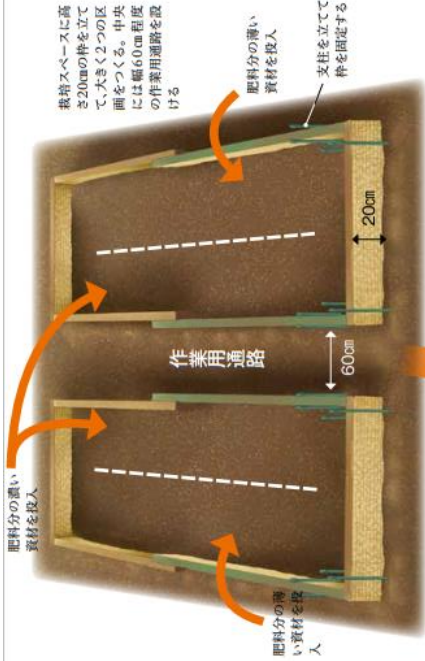
ビニールマルチを学ぶ



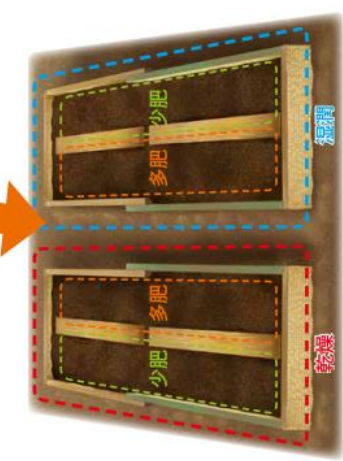
明大農学部で開かれた「アグリカルチャー」にて 老人会農園で、肥料袋でマルチを掛ける

「やさしい畑」4月号(P90・91) 小菜園徹底使い回し、畑の構造、多肥・小肥、畑地の水分要求度など、この「農園便り」4ページに、掲載しました。

枠で囲って土を盛る かき上げの術



計4つのエリアができる

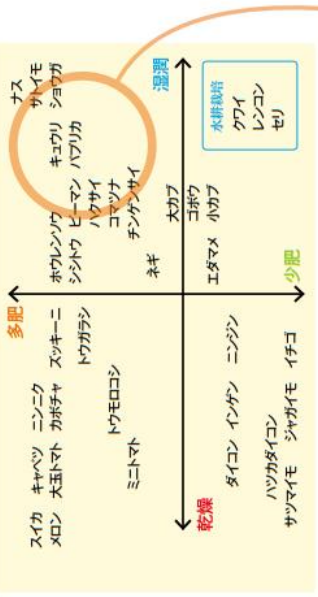


間口さんは裏を繼に4等分したのものを使用。1階築品なので肥料はいただきました」

写真右は肥料分の濃い資材、左は薄めの資材を入れた

土づくりのときにに入れる資材を変えたことで、1つの枠の中に肥料が多めのエリアと少なめのエリアができる。さらに、湿潤を控んで右側は水分を好む野菜、左側は乾燥した環境を好む野菜を育てる

エリアごとに 性質の異なる野菜を育てる すみ分けの術



表に従って作付ける



トウモロコシは隣裏に受粉させるために2列植えに

さまざまな利用者が入れ替わり、使用区画農園で、最初のハトドールとなるのが土づくり。私は、私自身が、利用者のなかには、契約終了とともに自分の育てた土をリヤカーに載せて次区画へ、引越す。させる人も見かけますよ」

そ代わりに簡口さんおこなっているのが、「かき上げの術」。使用開始とともに区画全体を枠で囲い、その中に土づくり資材を投入することで、表層だけを好みの土に仕立てます。枠の材料は、ホームセンターで売っているアクリル製の珪板やベニ板など、なんでもよいですが、簡口さんは壁紙で覆った状態を崩壊してもらっています。「い草とわらでできているので、だんだん半生ほどで朽ちてきますが、崩れた箇所は適宜敷き直しすればよろしい」

差料をつける

枠の中で土づくりをするさいにも工夫。場所によって投入する資材の量や種類を変えることで、肥料の濃い部分と薄い部分をくり出します。たとえば同じ

動物性肥料でも、牛ふんとわずかな肥料分の多い豚ふんどで差をつけてもよいでしょう。

さらに、使用区画全体を水分が多めの側と少なめの側の2つに分けて管理します。これで、「肥料の多い・少ない」と「水分の多い・少ない」の組み合わせ、計4つのエリアができたこととなります。

ここで、「すみ分けの術」の出番です。野菜には、肥料分を多量必要とする種類と、むしろ少ないほうがよく育つ種類があります。さらに、水を好むものと好まないものもあります。これらを、先ほど分けた4つのエリアに順に分けて植えつけます。「かならず守る必要はありませんが、このように作付けルールを決めることで、野菜の性質がよくわかるようになり、管理も簡便にやすくなります」

「水浸敷」とは、水を溜めたコンテナのこと。転倒しないように、半分ほど土に埋め込む。区画農園で水耕を行うさいのポイラントには、ポリアラがわめないように育てたメダカを放しているのでも、その心配はありません」